

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成24年9月5日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科

理学研究科 生物科学専攻

職 名・学 年

博士後期課程1年

氏 名

佐藤 杏奈

助成の種類	平成24年度 国際研究集会発表助成	
研究集会名	第24回 国際霊長類学会(IPS)メキシコ大会 International Primatological Society XXIV Congress Mexico 2012	
発表題目	霊長類2種における乳児画像への選好性の検討 Preference for infantile image in two primate species	
開催場所	メキシコ合衆国・キンタナ・ロー州・カンクン	
渡航期間	平成24年 8月11日 ~ 平成24年 8月19日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(ポスター発表証明書)	
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000円
	使用した助成金額	200,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	渡航費全額 302,470円の中の200,000円
		【航空費全額内訳】
		邦貨払旅客運賃 240,400円
		成田国際空港税 2,540円
海外空港税 7,530円		
航空保険料+燃油付加料金 52,000円		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)	

平成 24 年 国際研究集会発表助成Ⅱ期 成果報告

理学研究科 生物科学専攻 霊長類学・野生動物系 博士後期課程 1 年 佐藤杏奈

参加研究会名：第 24 回 国際霊長類学会(IPS) メキシコ大会

International Primatological Society XXIV Congress Mexico 2012

開催場所：メキシコ合衆国・キンタナ・ロー州・カンクン

開催期間：平成 24 年 8 月 11 日～19 日

【会議概要】

今回、報告者が参加・発表した国際霊長類学会(IPS)は、人類進化の解明を目指した霊長類学の発展を目的とした国際学会である。霊長類学は戦後間もないころから、京都大学を中心とした日本の研究者コミュニティが国際的に分野をリードしてきた学会であり、IPSでの存在感は非常に高い。日本の研究が今もなお、最先端を進み続けている。2年に一度行われる、IPS大会では、最先端の研究成果の情報交換をする場だけではなく、直接発表をし、国際的な交流を果たすことで研究者として国際的に認知されるうえで、欠かせない場となっている。今大会でも、心理・生態・形態・保全などあらゆる分野の発表・意見交換が積極的に行われ、大会期間中、口頭発表・ポスター発表合わせて 842 の発表(口頭発表 663 : ポスター発表 179)が行われた。

【成果概要】

申請者は、ニホンザルを対象に、乳児の画像を用いて養育行動の生物学的基盤について明らかにするために研究を行っている。乳児に特有な物理的特徴(大きな瞳や小さな鼻・口、広く突き出た額、丸い頬、短い四肢など)は、かわいいという「感情」を喚起し、鍵刺激となり、養育行動を引き出している、動物行動学者のローレンツは提唱した。これはローレンツの幼児図式仮説と呼ばれている。幼児図式(乳児特有の物理的な特徴)は哺乳類と一部の鳥類に普遍的存在しており、ヒトに限らず他の動物種においても、同様な選好反応が期待されるはずだが、ヒト以外の動物ではほとんど検討されてこなかった。今回、国際霊長類学会で発表した申請者の研究は、ニホンザルとキャンベルズモンキーを対象に、視覚対呈示法を用いて乳児への選好性の有無について検討したものである。実験では、ニホンザルのオトナメスの全身写真と、アカンボウ(0歳児)の全身写真を刺激として用い、対呈示して、その注視時間を分析した。その結果、ニホンザルにおいても、キャンベルズモンキーにおいても、乳児の画像に対して注視時間が長くなった。特に、キャンベルズモンキーでは、ニホンザルを見たことがないにもかかわらず、ニホンザルでの結果と同様にアカンボウ画像に対する注視時間が長くなったことから、種を超えた選好性が存在してい

る可能性を示唆された。このように、ヒト以外の動物における乳児画像に対する選好性について議論したポスター発表を8月15日に行った。前述のように、国際霊長類学会は、霊長類に関する様々な研究が行われる大会ではあるが、申請者のような養育行動に関する心理実験的な研究は、昨今ヒトで少しずつ進展してきたばかりでいまだ少なく、多くの人の興味を引く内容であったらため、ポスター発表には多くの人々が訪問してくれ、大盛況であった。また、これらの発表内容は、ちょうど5月上旬に、修士論文の一部の成果が、論文として定評のある国際誌(PLoS ONE 誌)に受理され、学会で発表する前にすでに成果を発表できる運びとなっていたため、それを知って訪ねて来てくれた研究者も多かった。

大会期間中は、自分の発表を行う以外に、積極的に様々な研究発表を聞くことができた。申請者の専門分野である動物行動学や実験心理学の研究だけでなく、生態や保全に関する発表を視聴することも非常に有意義であった。特に、申請者の研究は、社会関係に深くかわる内容であることから、フィールドワークで個体間の社会関係を研究している発表などは、今後の自分の研究の方向性を考える上で、非常に有益なものとなった。

また、今回ポスター発表する内容の実験を共同で行ったフランス人研究者の Alba Lemasson 氏とも国際霊長類学会で再会することができた。今回のポスター発表の内容の一部である、対象動物としてキャンベルズモンキーを扱った実験は、Alban Lemasson 氏の所属するレンヌ第一大学の生物観測所(station biologique)の霊長類飼育施設で行ったものである。申請者の所属する霊長類研究所の正高研究室と交流が深い研究室であるため、今後の研究に関する打ち合わせも十分に行うことができた。

【謝辞】

今回の国際学会を通して、貴重な経験をさせていただくことができ、今後研究を行っていく上で非常に価値のある学会参加となりました。助成をして下さった京都大学教育研究振興財団さまに感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。